

【記録集】

平成25年度文部科学省事業
「学校と地域の新たな協働体制の構築のための実証研究」

「泉都別府『協育』プロジェクト事業」 コーディネーター養成研修会



大分大学旦野原キャンパスから別府方面を望むと、全ての子どもたちを芽生えさせる役割を担う各種機関を象徴する新緑の由布岳（春）、子どもたちをしっかりと地域に繁茂させる学びの場として地域の団体・グループを象徴する青々と茂る鶴見山（夏）、紅葉で染まる高崎山（秋）は最終的に輝く社会人を育てる企業を象徴しています。

この3山の連なりと、県鳥であるメジロ（ウグイス色）が3山に広く生息している様子を図案化したものです。この3連山のように繋がって、大分県の発展のために教育の協働を推進していく方向性を示しています。

期日 1回目：平成25年12月5日（木）・6日（木）

2回目：平成26年2月26日（水）

会場 大分県立社会教育総合センター

主催 おおんせん県おおいた泉都別府『協育』プロジェクト

1. 趣旨

青少年の健全育成についてこれまでは、家庭、学校、地域社会がそれぞれの取り組みとして行うことにとどまっており、別府市においても、それぞれの単独での取り組みでは対応できない様々な課題が多くあると言わざるをえない状況です。そうした中で、家庭、学校、地域社会の相互の連携協力を促し、それぞれの教育力を向上させるとともに、教育を協働して行う重要性が認識されてきました。

こうした現状を踏まえ、別府市では、家庭・学校・地域社会が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的とし「別府市地域教育力活性化事業」実施してきました。さらに、平成25年度から3年計画で、全ての小中学校をコミュニティ・スクールに指定して、地域の教育力を活用して、家庭・学校・地域が一体なって子育てをする街づくりの取り組みを始めました。本事業は、文部科学省事業「学校と地域の新たな協働体制の構築のための実証研究」を「泉都別府『協育』プロジェクト」というネットワーク組織が受託するもので、その1つの取り組みとして「ボランティア活動を促進するための研修会」（コーディネーター養成）を開催するものです。

2. 主催 泉都別府『協育』プロジェクト

参考：泉都別府『協育』プロジェクト委員関係者

別府市内の教育関係者、別府市PTA連合会、別府市退職校長会、立命館アジア太平洋大学別府大学、大分大学高等教育開発センター、大分県中小企業家同友会、NPO法人ハットウ・オンパク、NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの各代表者、温泉研究関係者等

3. 参加対象

別府市内の公民館等社会教育関係者、学校教育関係者、PTA 関係者、ボランティア活動者、教育施設・機関関係者、自治会関係者 など

※別府市外の方の参加もお待ちしています。

4. 研修内容

(1) 第1回研修会（12月）

1) 午前中は、教育関係者に加えて、一般の方に幅広く参加していただきます

①別府市における「教育の協働」の取り組みの方向性

②「教育の協働」の推進に関する先進地（東京都杉並区を中心に）の事例

2) 午後は、社会教育や学校教育でのコーディネートに関する方を中心に参加していただきます

③「教育の協働」の仕組みづくりとコーディネーターの役割

3) 2日目は、日常のコーディネートからの課題を具体的に考えます

(2) 第2回研修会（2月）

①「教育の協働」を推進するコーディネート機能とコーディネーターの職務

②コーディネーターが提案する学びのプログラムづくり

5. 参加申し込み先（「泉都別府『協育』プロジェクト事務局」です）

①郵送先：〒874-0834 別府市新別府2組-1 安達美和子 宛て

②E-mail 申込み：kyoukujimu@kyouiku-adviser.net（NPO 法人大分県「協育」アドバイザーネット）

③問合せ/申込み：電話/FAX：097-554-6027（大分大学高等教育開発センター 教授中川忠宣）

6. 第1回目研修日程（12月5日（木））

時間	研修内容と講師
9:20～ 10:00～	<p>研修1（講義）：別府市における「教育の協働」の取り組みの方向性 講師：別府市教育委員会 ※別府市の地域教育力活性化事業の現状や、今後のコミュニティ・スクールの導入に関する方向性について講義する</p>
12:10	<p>研修2（講義）：「教育の協働」の推進に関する先進地（東京都杉並区を中心に）の事例を通して教育の協働の意義と方向性を考える 講師①：杉並区立杉並第一小学校学校支援地域本部長 伴野博美氏 演題：学校支援地域本部の取り組みから、その成果と地域社会の役割を考える ～学校運営協議会・PTA・放課後子ども教室等の事業から～ 講師②：特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク 理事長 生重幸恵氏 演題：「教育の協働」の意義と地域コーディネーターの重要性を考える ※国が示す方向性を基にして、コーディネート機能や地域住民の参画の全国の事例から考える</p>
13:00～ 16:00	<p>研修3（熟議）：「教育の協働」の仕組みづくりとコーディネート機能を考えます 【模擬熟議】 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）と学校支援地域本部の協働への歩みを熟議（評価→企画→協働システム）をとおして考えます。 →まとめ：「別府市流のコミュニティ・スクール」支援システムを提案する チーフファシリテーター 生重幸恵氏 サブファシリテーター 伴野博美氏 サブファシリテーター 中川忠宣氏（大分大学高等教育開発センター教授）</p>
10:00～ 12:00	<p>研修4（熟議）：日常のコーディネートの課題を考える。 ファシリテーター 中川忠宣氏（大分大学高等教育開発センター教授） アドバイザー 生重幸恵氏 伴野博美氏</p>

申込み記載内容様式

- 申込み代表者（1）申込み代表者氏名（2）連絡先住所（自宅・職場を明記）及び電話番号
- 参加者名簿（1）参加者氏名（2）所属（下記の番号）（3）参加内容（下記の番号）

①社会教育関係職員 ②学校教育関係職員 ③教職員 ④PTA ⑤公民館運営審議会委員
 ⑥社会教育委員 ⑦学校運営協議会 ⑧地域団体・組織 ⑨企業 ⑩ボランティア ⑪その他

参加内容 ①午前のみ ②午後のみ ③1日中

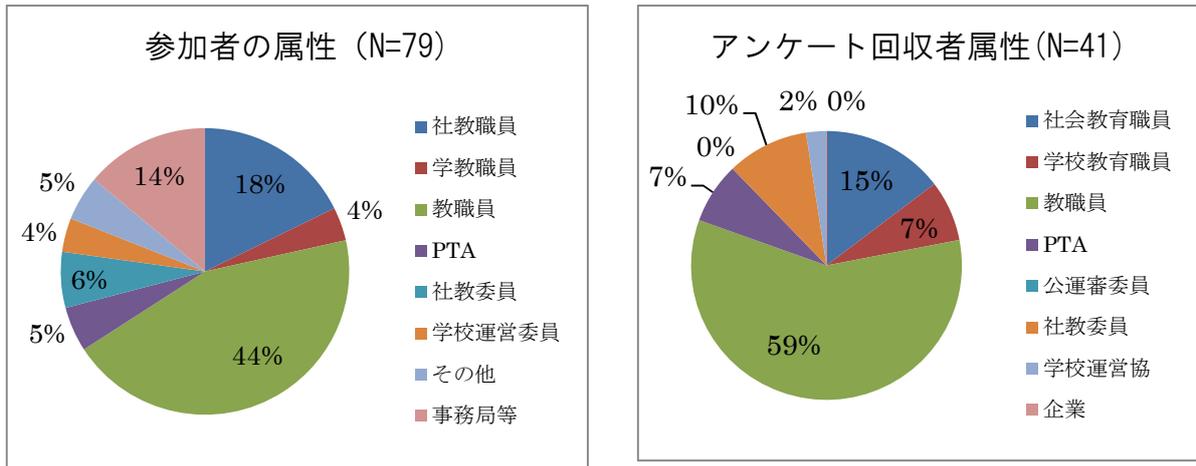
7. 第2回目研修日程（平成26年2月20日（木））

時間	研修内容 と 講師
9:20～	開会あいさつ
9:30～	<p>研修1（講義）：別府市におけるコミュニティ・スクールの取り組みの方向性を知る 内容：第1回研修会で説明・報告があった、別府市の地域教育力活性化事業をベースとした今後のコミュニティ・スクールの導入に関する説明等を行います 講師：別府市教育委員会</p>
10:10～	<p>研修2（事例報告）：県内の実践事例から教育の協働を考える ＊実践による学校教育活動の成果と子どもたちの変容や、課題・今後の方策等について、県内の先進事例を報告します。</p> <p>事例1 佐伯市立上堅田小学校の学校支援地域本部事業の取り組み 講師：佐伯市立上堅田小学校 伊東俊昭 教頭</p> <p>事例2 玖珠町立玖珠中学校のコミュニティ・スクールの取り組み 講師：玖珠町立玖珠中学校 宗岡 功 校長</p>
11:30～ 12:10	<p>研修3（講義）：第1回コーディネーター研修や全国先進地等から見たもの ＊第1回目の研修で提案した「別府市流のコミュニティ・スクール」システムや全国の動き等について報告します。 講師：大分大学高等教育開発センター 教授 中川忠宣氏</p>
13:00～	<p>研修4（演習）：コーディネーターが提案する学びのプログラムづくり 【熟議】 第1回の研修会で設定された3つのテーマについて、コミュニティ・スクールが求める課題対応への学校支援活動に関する提案型プログラムを考えます。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>テーマ1：いじめ・不登校・暴力等の生徒指導の課題を解決する</p> <p>テーマ2：学校と地域が連携して児童生徒の学習意欲を高める</p> <p>テーマ3：地域が学校に協力的になるための情報の共有を進める</p> </div> <p>＊ファシリテーター 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長 生重幸恵氏 大分大学高等教育開発センター教授 中川忠宣氏</p>
15:40	閉会挨拶

アンケートから見る研修の成果と課題

1. 属性

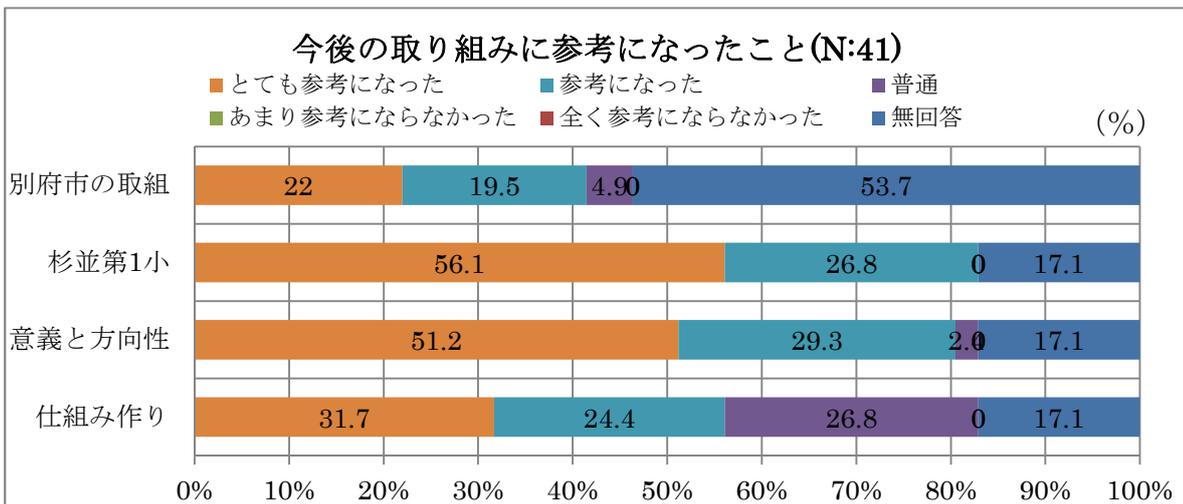
第1回コーディネーター研修会の参加者は研修者 68 名事務局 11 名の合計 79 名であった。特に教職員がもっとも多く 38 名である。そのうちアンケートを回収出来た数が 41 である。



2. 評価の概要

(1) 研修会の理解度

※「これまで気付かなかった等、今後の取り組みに参考になったか」という視点で評価する。



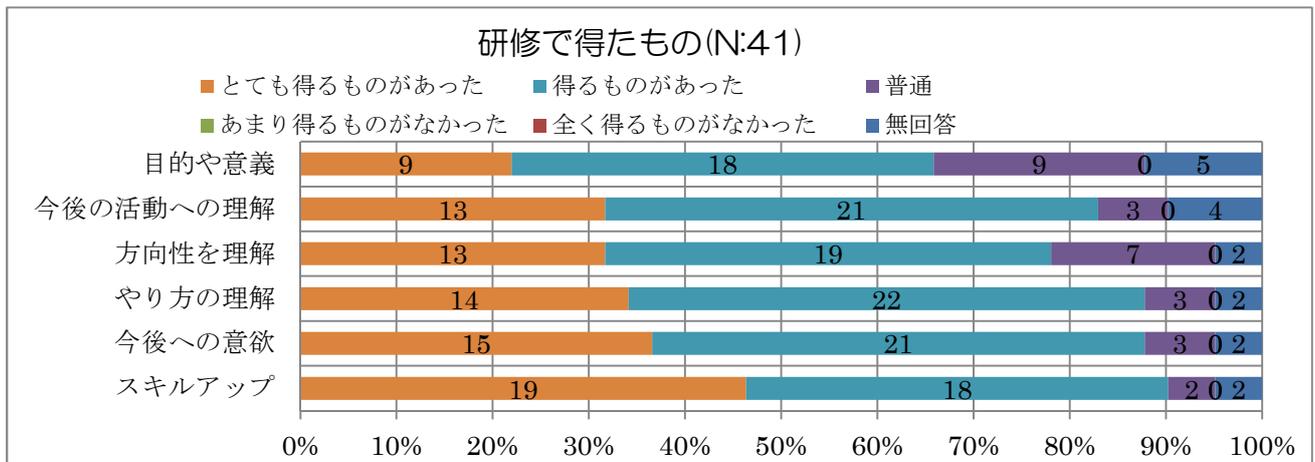
研修受講前に学べていなかった内容に気付いて頂く設問である。今回の研修を通しての新たな気づき等を調査する主旨でおこなった。

まず別府市の取り組みに関しては 40%ほどが参考になったと回答している。杉並第一小および意義と方向性に関しては、80%以上は参考になったと回答しておりこれまでほとんど学ぶ機会がなかったと推測出来る。仕組み作りについても 80%の参加者にとって有効であった。

このことから先進事例や取り組み、システム作りについては新しい研修であったと評価出来る。

(2) 自己評価

※「この研修に参加したことで何を得たのか」という視点で自己評価する。



今後推進していく立場にある参加者にとって今後自分の活動へのプラスになった学びについて自己評価する調査である。

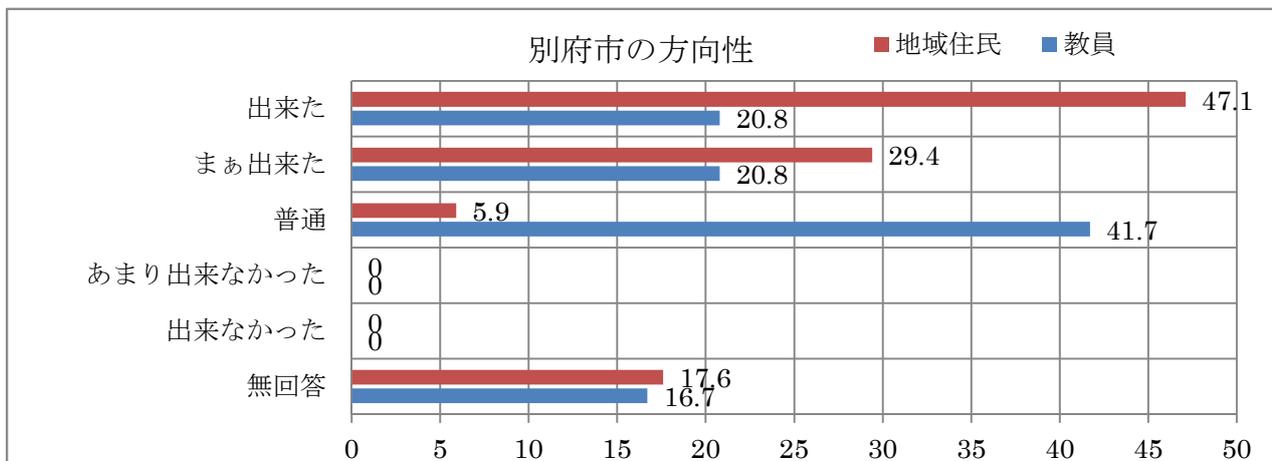
全ての項目において否定的な回答は0であった。目的や意義について65%が得るものがあったと回答している。その他の項目においては80%以上が得るものがあったと回答している。特にやり方の理解、今後への意欲、スキルアップ等が90%近いということは今回の研修が有効であったと評価出来る。

3. 項目別<教職員と地域住民（教職員以外）の比較>の評価

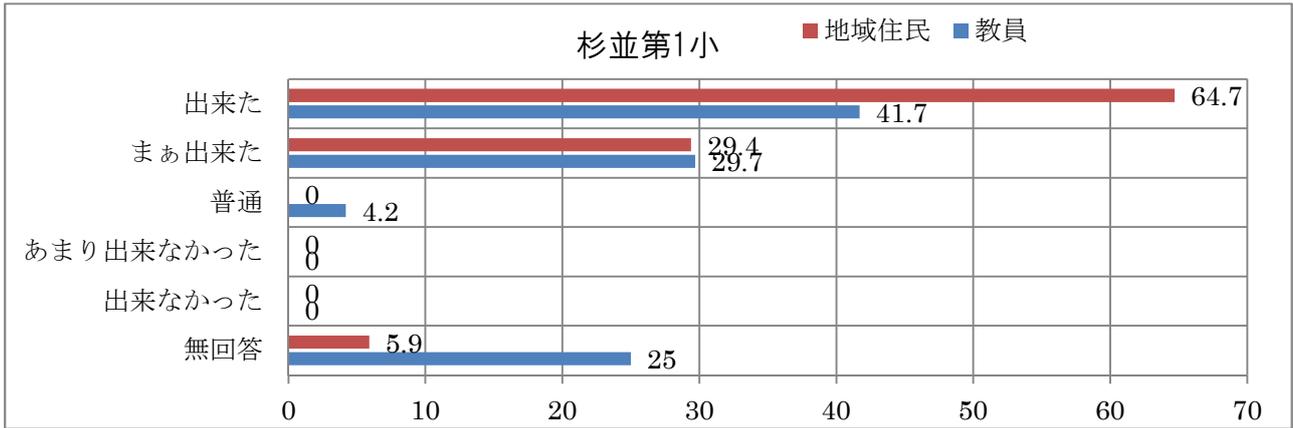
支援のニーズの立場としての教職員の意識等支援のシーズの立場としての地域住民の評価を比較しどちらに有効な研修であったかを調査することとする。

(1) 研修会の理解度

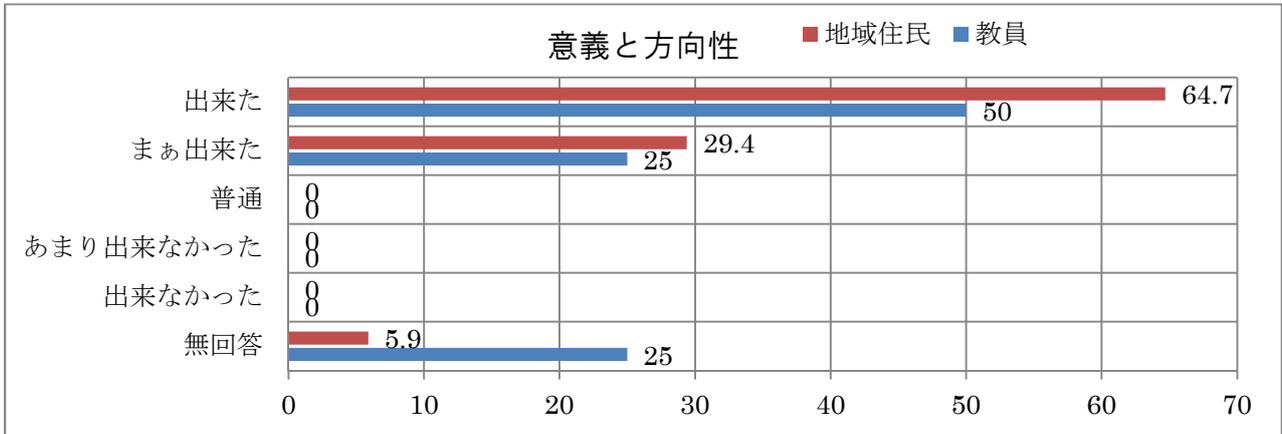
※「これまで気付かなかった等、今後の取り組みに参考になったか」という視点で評価する。



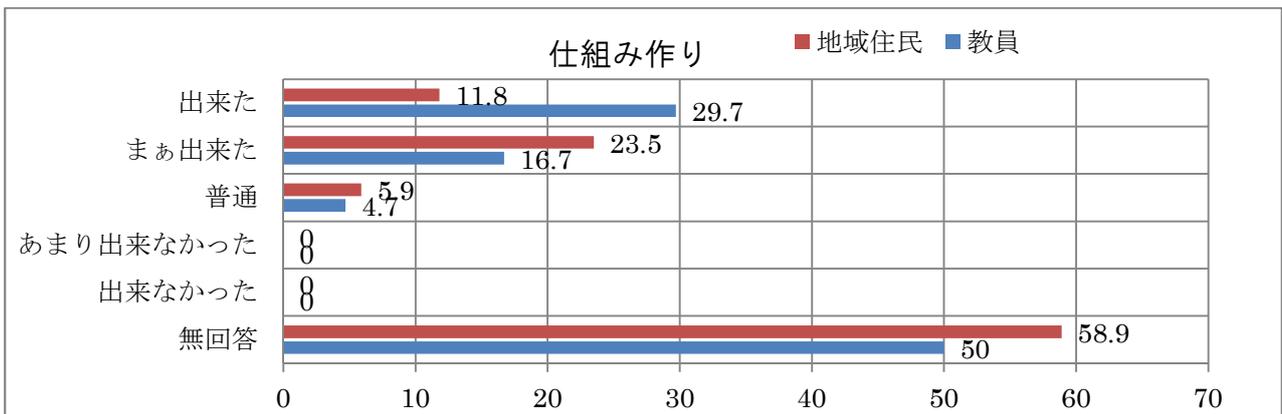
別府市の方向性について、教職員では41%が「参考になった」と回答している。地域住民では77%という高い割合で「参考になった」と回答している。地域住民へのこれまでの説明が不足している事がうかがえる。



先進事例である杉並第一小の取り組みでは地域住民が94%が理解できたと回答している。教職員においても71%という高い割合である。



意義と方向性については地域住民94%という高い割合教職員においても75%という高い割合で「今後の取り組みに参考になった」と回答している。

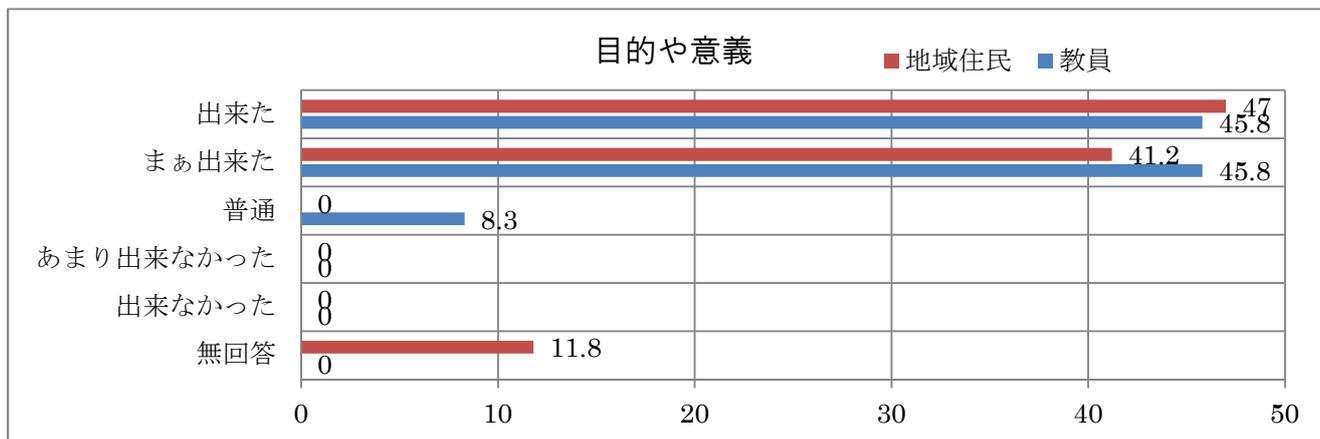


仕組み作りについては教職員地域住民共に40%程度が参考になったと回答しており無回答が50%以上であった。

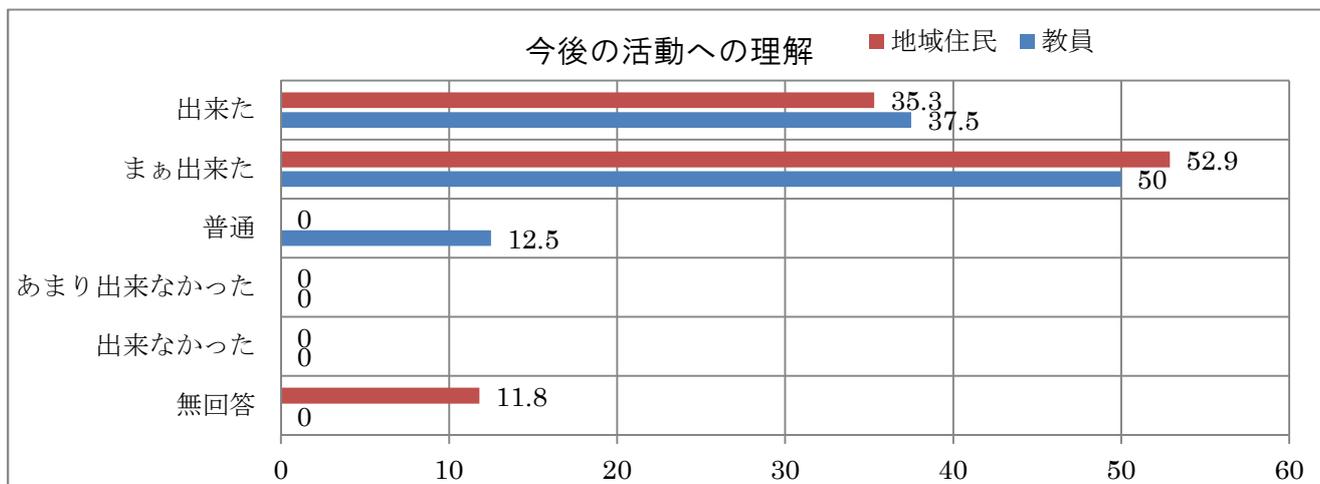
グラフの1（別府市の方向性）～グラフ3までの講義による各種情報については、地域住民へ有効であったことがわかる。仕組み作りの研修は無回答が多く研修の主旨が達成出来なかった可能性がある。このことは研修を主催する側と研修者の意識の差がもたらしたことである可能性がある。

(2) 自己評価

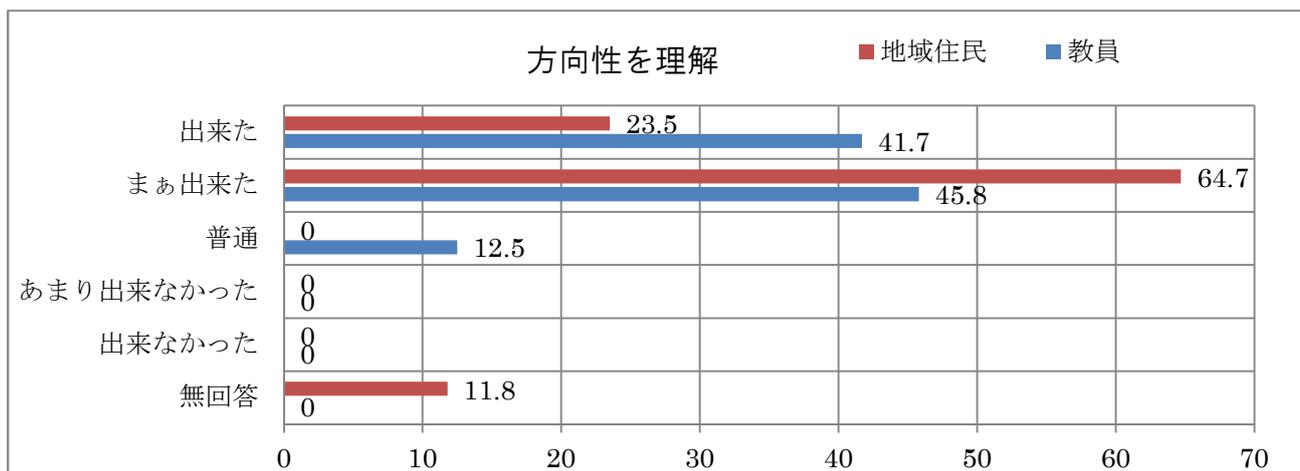
※「この研修に参加したことで何を得たのか」という視点で自己評価する。



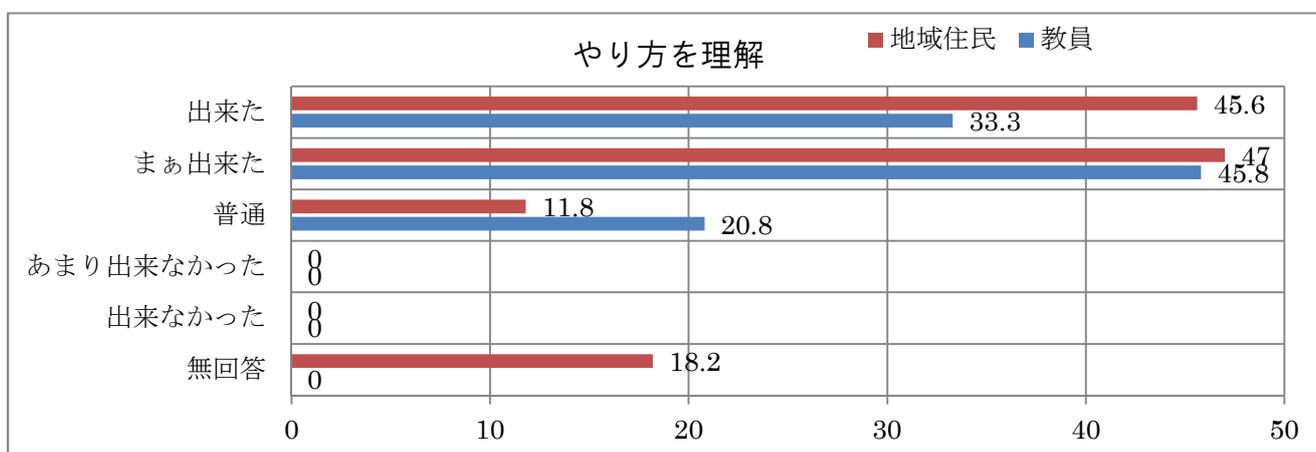
目的や意義では地域住民教職員共に 90%近くが出来たと評価しており差はあまりない。



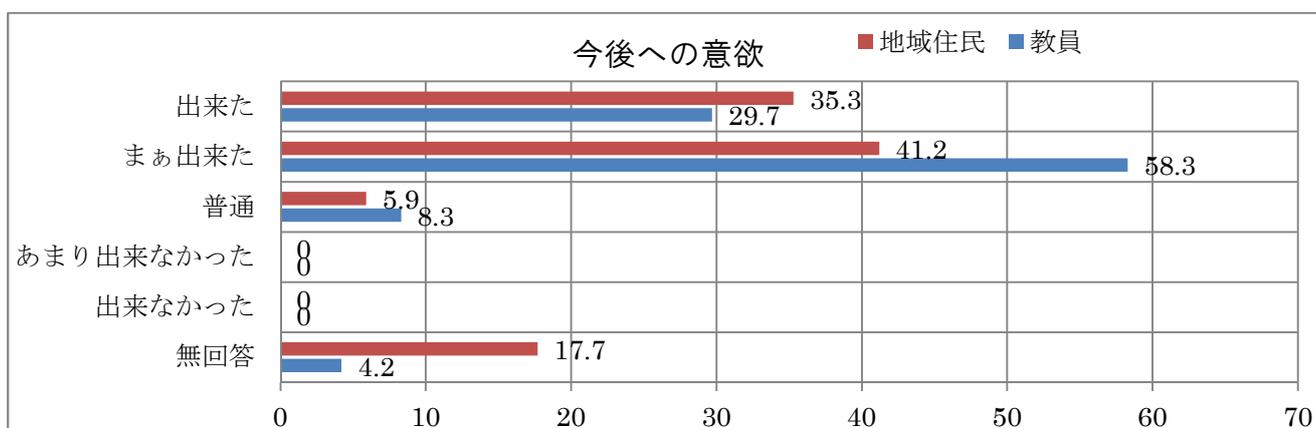
今後の活動への理解については地域住民教職員共に 90%近くが出来たと評価しており差はあまりない。



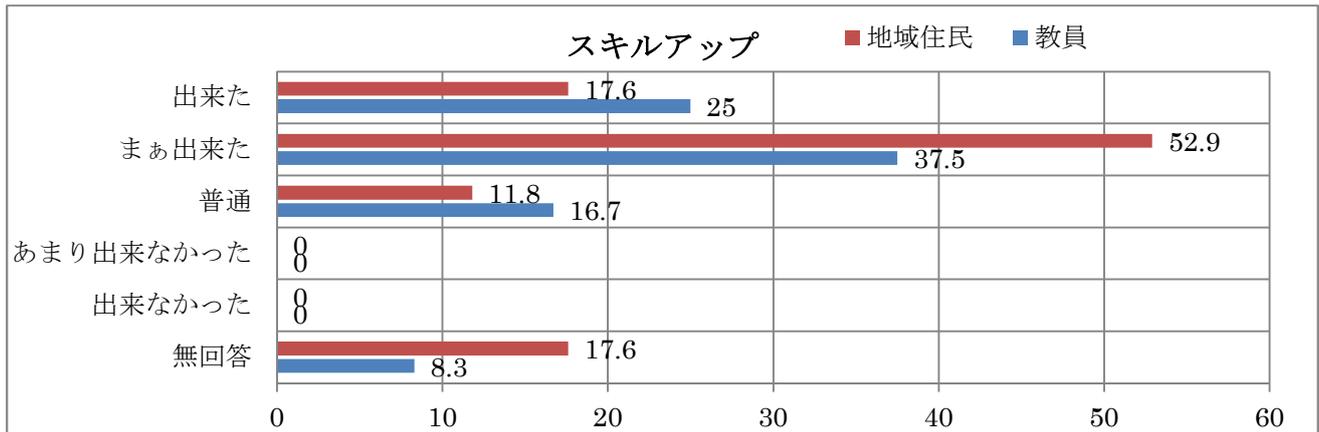
方向性の理解については地域住民教職員共に90%近くが出来たと評価している。ただし、教職員の方がより出来たことがグラフからわかる。



やり方の理解においては地域住民は93%教職員では79%が出来たと回答しておりやり方に関する学びで得たものは地域住民の方が多い。



今後のへの意欲については教職員が88%と高く地域住民が71%となっており教職員への効果があったことがわかる。



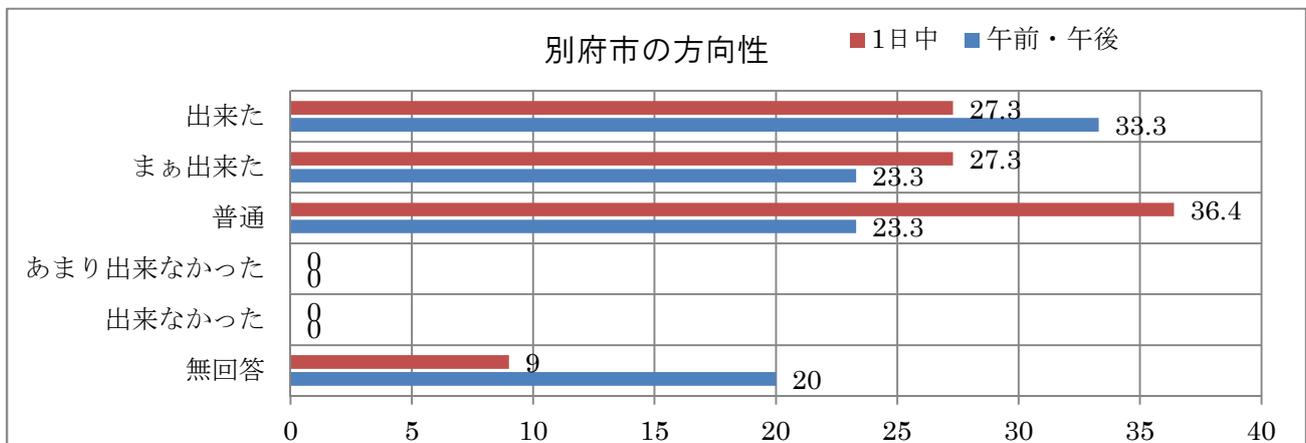
スキルアップについては、地域住民、教職員共に 70%程度が「得るものがあった」と回答しており、今後の活動への基礎的な学びがあったと評価している。

3. 項目別〈午前・午後と一日参加の比較〉の評価

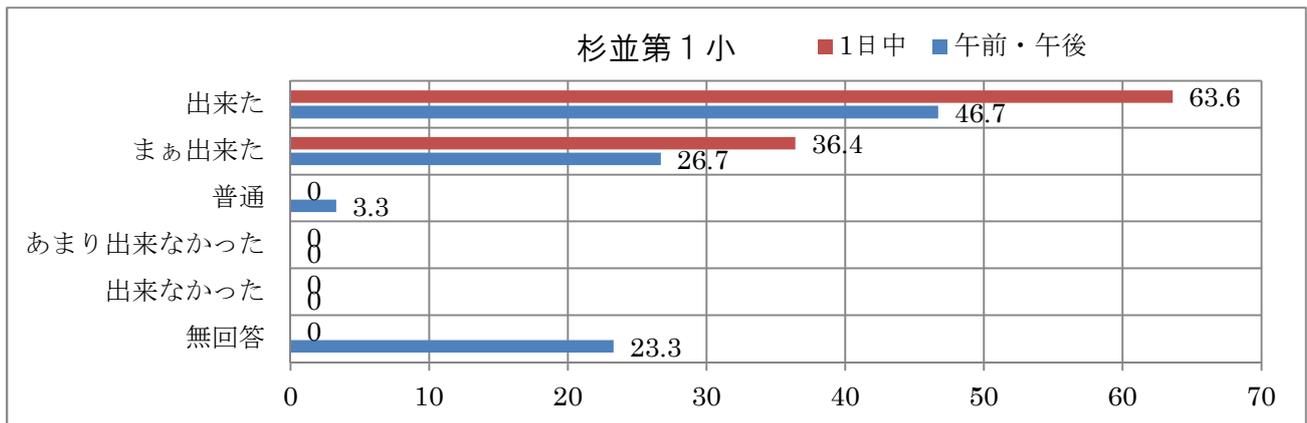
1日の受講者とそれ以外（午前のみまたは午後のみ）の受講者の学びを比較し、どちらに有効な研修であったかを調査することとする。

(1) 研修会の理解度

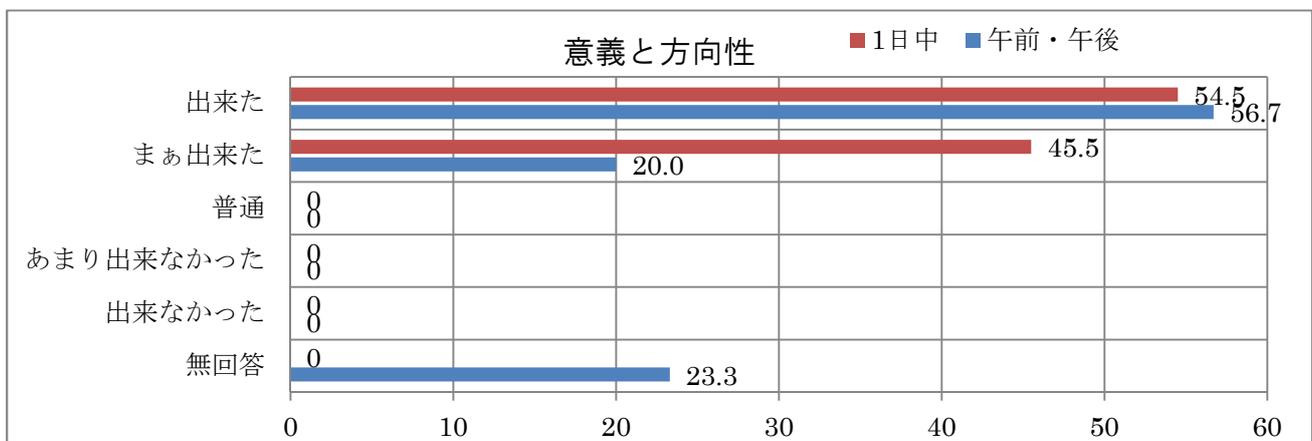
※「これまで気付かなかった等、今後の取り組みに参考になったか」という視点で評価する。



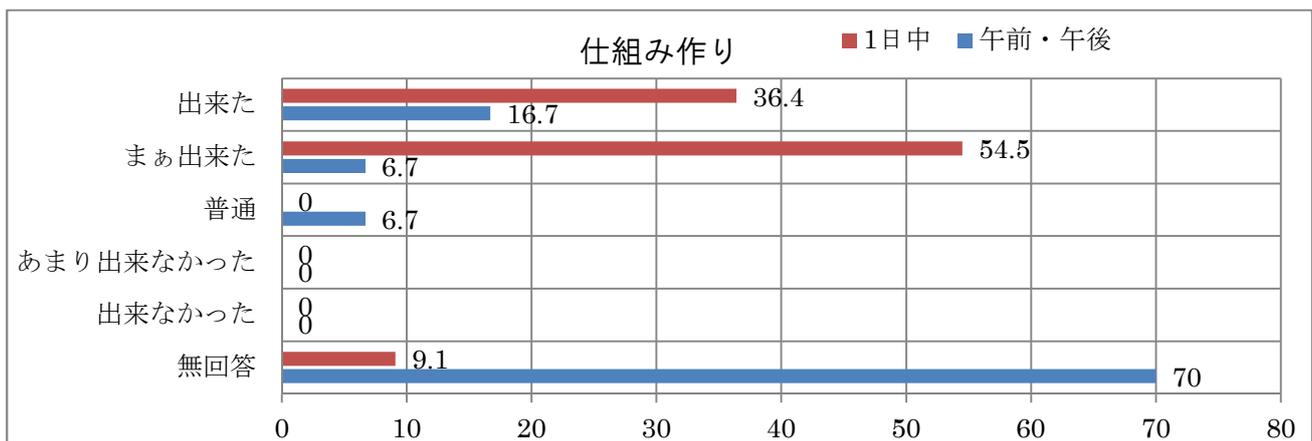
別府市の方向性の理解については、あまり差が見られない。



杉並第一小の取り組みについては、1日参加の方が参考になったという回答が多い。



意義と方向性についても、1日参加の方が参考になったという回答が多い。

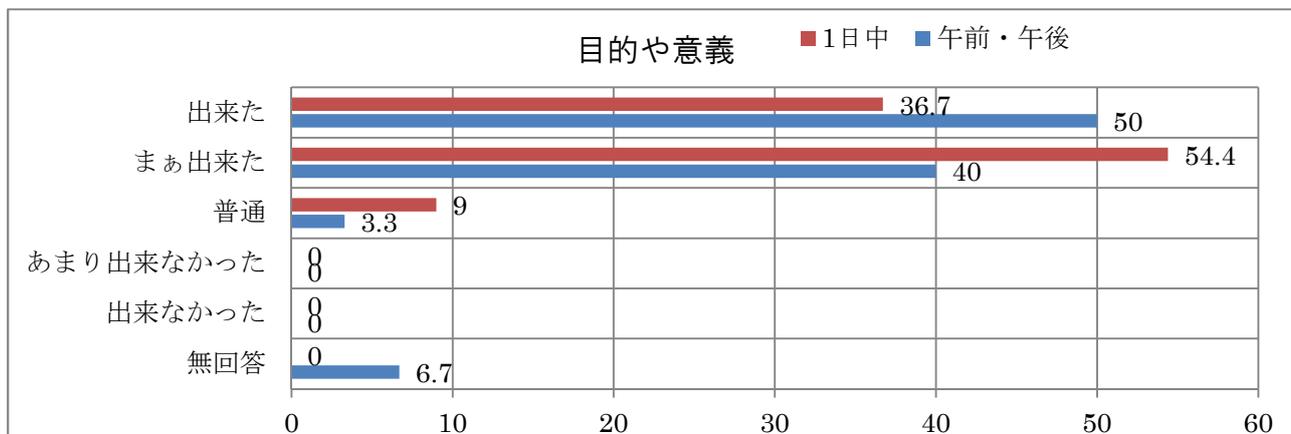


仕組み作りにおいては、1日参加の方が参考になったという回答が圧倒的に多い。

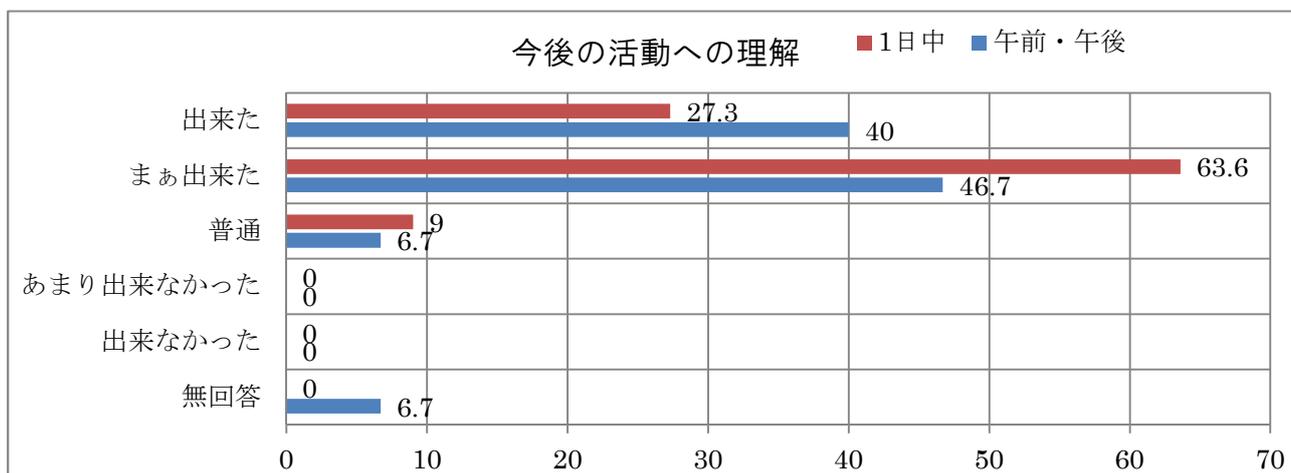
全体としては、午前又は午後だけの参加者は無回答が多いため単純に考察できないが、回答者の傾向として評価すると1日参加の方が「今後の取り組みに参加になった」という回答が多い。

(2) 自己評価

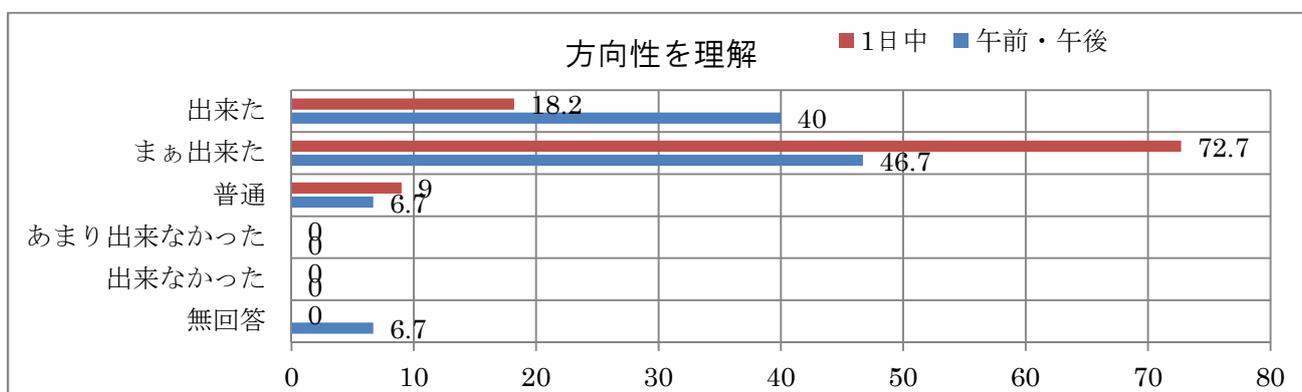
※「この研修に参加したことで何を得たのか」という視点で自己評価する。



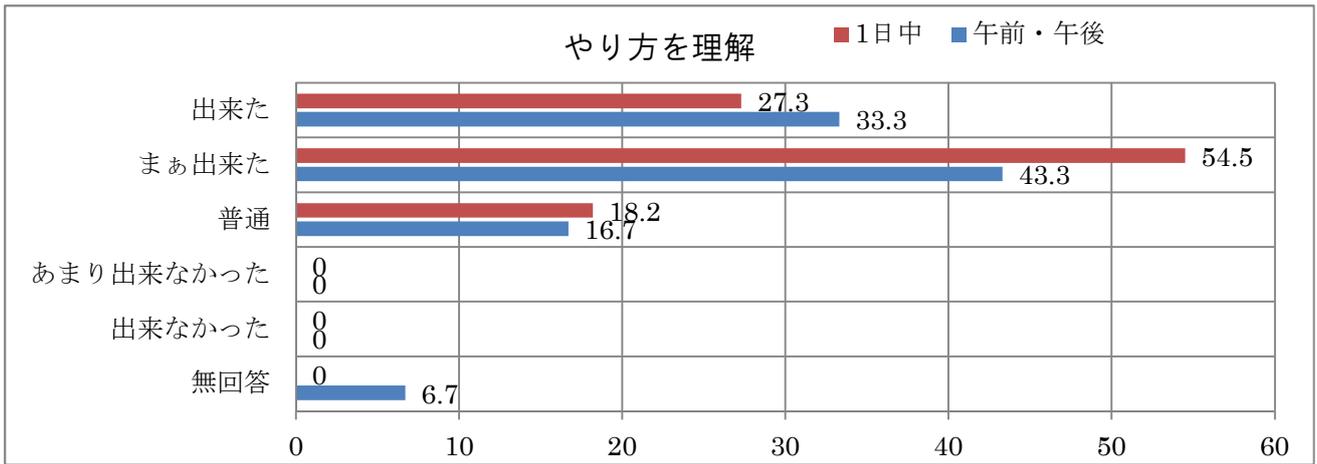
目的や意義においては「出来た」という回答は90%とほぼ同じである。



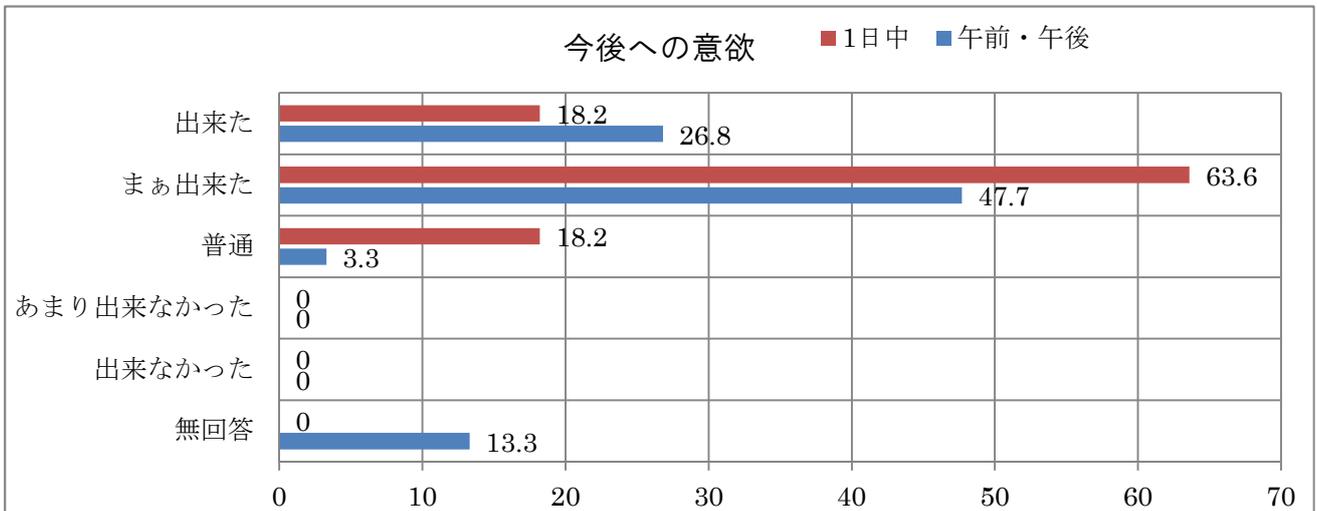
今後の活動への理解においては「出来た」という回答は90%とほぼ同じである。



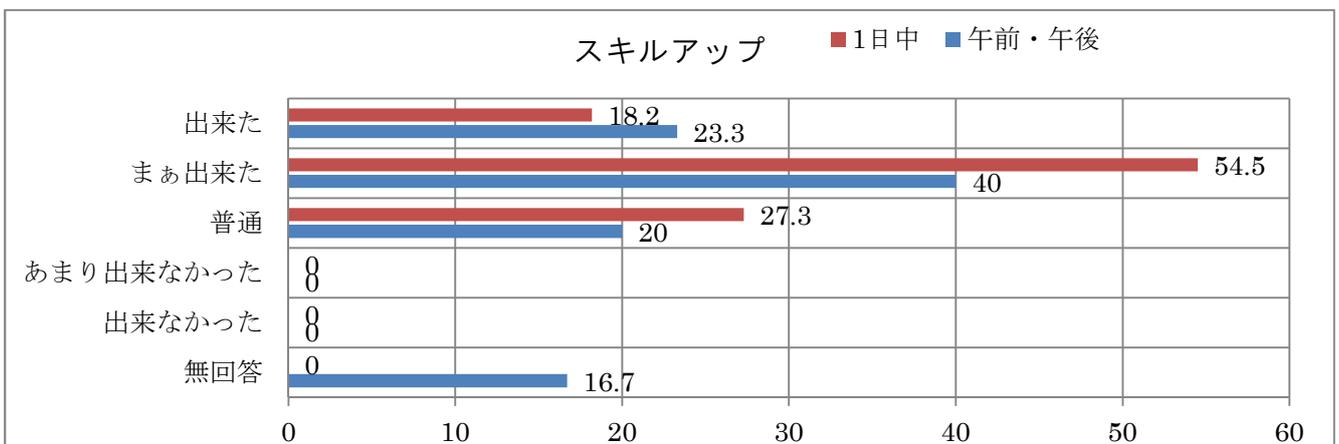
方向性と理解においては「出来た」という回答は90%とほぼ同じである。



やり方を理解においては「出来た」という回答は80%とほぼ同じである。



今後への意欲においては「出来た」という回答は80%とほぼ同じである。



スキルアップにおいては「出来た」という回答は70%とほぼ同じである。

自分の今後の取り組みのために得たものについては（午前のみまたは午後のみ）の受講者の方が全て

の項目において「出来た」が多く、「まあ出来た」は1日参加の方が多い。このことは1日参加して深く学ぶことによって今後の取り組みの課題の難しさに気づいたため、積極的に「得た」と回答出来なかったと解釈出来るであろう。半日による気づきの場合はその時点で「得た」と判断し1日参加との学びの意識の深さが異なるものと分析する。

4. 自由記述から見る「必要な取り組み」

(1) 教職員

「学校が行うこと」

- ・開いていく自分自身を、共感出来る機会、場を設けることが大切だと思う
- ・子どもに関わる諸問題や、学力向上など学校が支援して欲しいことを地域の力を借りていこうとする動き
- ・教職員に協育の必要性を広げていくこと
- ・「協働」という意識を教職員がしっかりと持ち、地域に根ざした学校作り、地域の人材を遠慮せず活用させてもらう教育計画を知っていくべき時期がきている気がします
- ・学校としての共通理解、意識改革
- ・コミニティースクールに対する全職員の共通理解
- ・取り組みの実際を知ること、事例に並ぶこと
- ・事例に触れる機会を持つこと
- ・CS理解を深めるのにふさわしい地域の人材を見つける
- ・校内研修でCSについてもう少し深めていく
- ・情報発信
- ・どのような係を深めるかの検討

「行政が行うこと」

- ・学校と地域を結ぶ地域の人材探し、予算確保
- ・地域への働きかけ
- ・実働部隊のサポート・予算面はもちろん、人的サポート（人材バンク等）
- ・職員研修の企画と実施
- ・学校運営協議会の指定と実践交流の場の設定
- ・取り組みを多くの人に知ってもらい協力を得られるようにする、整備
- ・人の配置の予算取り、約1000万の経費ではあるがH27全校のためには必要なこと
- ・人材の確保、予算の確保

「地域社会が行うこと」

- ・自分に出来ることを子ども達のために活かしていく
- ・もっと積極的に学校との関わりを持つとする気持ちの必要性・自分のこと向き合い、話す時間を持つこと

「感想」

- ・学校の事情、教育課程をよくご存じの伴野先生の活動に感銘した

- ・生重先生の「出来る時に出来るだけ」のモットーのもと様々な取り組みや意義が良く理解できた
- ・地域、家庭、学校、三位一体が本当に大切だと言うことが身にしみました、そのために今後何が出来るかを考えていくことが必要だと感じました
- ・今日から改めて、地域、子どもそして保護者と向き合い、アイデアを持ち実行していく行動力をもちたいと思った
- ・学校に地域の方々が入ってくるのは少々厳しいなと感じていたが、実際、学校の教育だけでは運営していけないことも多くある、沢山の方々の力で子どもを育てていくことは子どもにとって素晴らしいことだと思えた
- ・地域社会が希薄化しつつある現代にあって「協働」ということが、1番重要なキーワードとなり、これからの社会（学校）の目指す方向性であることを確信しました（学校にとっても学校を取り巻く地域社会にとっても、双方に必要な価値あるものとして）
- ・他の教職員や保護者、地域の方にも来てもらえる機会があればと思います・
このような取り組みが別府でも可能にしたいです
- ・様々な立場の方々より、多くの実践例や実情を聞くことが出来大変勉強になりました
- ・杉並第1小学校等々のお話を聞く限りでは、「よさ」を沢山知ることが出来ますCSづくりは素晴らしいと思いますがこの形（CS）を悪用されそうな気がしてなりません。私は基本的にはCSは賛成のスタンスですが、メリットとしては教職員の教育のサポートと補充が得られ、教育効果が上がりそうであると思います
- ・様々な事が学校に入りやすくするためか、セーブ機能はあるのか・保護者として、地域の学校の教育活動に関心を持ち参加する
- ・出来ることを出来る時に協力

（2）地域住民（教職員以外）

「学校が行うこと」

- ・教員1人1人が意欲を持って取り組むこと
- ・地域に情報の提供 ・情報委提供・職員研修の中でCSや学校支援の共通理解をはかる

「行政が行うこと」

- ・地域への働きかけ
- ・実働部隊のサポート・予算面はもちろん、人的サポート（人材バンク等）
- ・予算の計上・CNを非常勤で良いので雇う方向で検討頂きたい

「地域社会が行うこと」

- ・もっと積極的に学校との関わりを持つとする気持ちの必要性
- ・自分のこと向き合い、話す時間を持つこと
- ・学校（先生の思いを知る）・学校へも足を運ぶべき

「感想」

- ・他の教職員や保護者、地域の方にも来てもらえる機会があればと思います
- ・このような取り組みが別府でも可能にしたいです
- ・組織のあり方を再検討

熟議からの提案

教職員とそれ以外の混合グループで、以下の内容について順に熟議を行った。その内容と提案された最終的な「別府市流のコミュニティ・スクール」支援システムを整理する。

1. 要望及び支援可能な内容

各グループで出された教職員の要望と、地域住民からの可能な支援内容についてまとめると次の通りである。

(1) 先生の要望

- ・教職員が子どもと向き合う時間を増やしたい
- ・地域が学校に協力的になるようにしてほしい
- ・家庭の教育力を上げてほしい
- ・体験活動への支援をしてほしい
- ・いじめ・不登校・暴力など生徒指導の課題を解決したい

・学校の施設

- ・環境などを整備したい
- ・安心、安全な環境作りのための協力が欲しい
- ・地域の教育力を上げてほしい
- ・地域を活性化してほしい

(2) 地域住民からの支援可能な内容

- ・児童生徒の学習意欲を高めたい
- ・保護者や地域による学校支援活動を活発にしてほしい
- ・地域と連帯した取り組みを組織的に行えるようにしたい
- ・学校と地域が情報を共有する
- ・学校に対する保護者や地域の理解を深めてほしい
- ・学校と地域が情報を共有するようにしたい
- ・地域が学校に協力的になるようにしてほしい
- ・家庭の教育力を上げてほしい
- ・いじめ、不登校・暴力など生徒指導の課題を解決したい
- ・児童生徒の学力を上げたい
- ・体験活動への支援をしてほしい
- ・地域を活性化してほしい

2. 熟議による「コミュニティ・スクールの運営協議会」と「学校支援組織」の役割の整理

各グループで取り組みのテーマを1つ設定して、そのテーマに沿って、「コミュニティ・スクールの運営協議会」と「学校支援組織」の役割の分類によって、その共通点と差異点を整理した。

(1班) テーマ1 : いじめ・不登校・暴力等の生徒指導の課題を解決する

【学校運営協議会の役割】

【傾聴】

- 子どもの話を自分の感情を入れなくて良く聞く
- 心理カウンセリングの教員、親合同の研修会

【環境】

- 学校の環境を整える

【情報公開】

- 学校の現状の情報公開
- 保護者も学校へ
- 学校公開の回数の増加
- より参加しやすい形でのPTAの開催

【道德の学び】

- 言葉遣いの荒れや暴力に繋がる行為への指導
- 親子で受ける道德の授業

【挨拶運動】

- 小学校入学の時から沢山の子に声をかける
- 自分の子どもだけではなく、他人の子も自分の子どものように
- 登校時の挨拶運動
- 皆で声かけ「元気かえ」「どうしたんかえ」など注意ではなく呼びかけ
- あいさつ
- 学校の中に野外学習が出来るようなステージ

【家庭】

- 朝ご飯を食べていない子への対策
- 規則正しい生活などの子どもの生活の安定

【学校支援組織の役割】

【学習支援】

- 学習支援をする（授業のサポートなど）
- わかる授業（学習サポート）
- 学習についていけない児童への支援

【相談窓口】

- 保護者の悩みを聞いてあげる場所を作る
- 困っている保護者に対する支援
- 悩みがあるときに相談できる

【体験教室・活動】

- 茶道・華道など文化を学ぶ場を作る

- 問題行動に詳しいベストティーチャー
- 楽しい活動で魅力有る学校
- 休みの時間にじっ所に遊んでくれたり、昔の遊びを教えてくれる方
- 放課後の見守り
- 学校外の居場所作り

(2班) テーマ1 : いじめ・不登校・暴力等の生徒指導の課題を解決する

【学校運営協議会の役割】

【家庭内のコミュニケーション】

- P T Aの中で名人探し
- 親自身が小学校の問題を解いてみて、一緒に勉強する
- 感情的に叱らない
- 子どもと一緒に風呂に入る
- 同じ布団で寝る
- 読み聞かせ
- 基本的な生活習慣を遅れるようにする
- 子どもに何か役割を与える
- 子どもの話を聞く
- 善悪の判断を付ける

【学校】

- 楽しい授業、わかる授業
- 担任が休み時間も職員室に戻らない
- 家での過ごし方を改善する
- 不登校児童の家庭訪問
- きたい学校、帰りたい家庭
- S C機能
- 朝の読み聞かせ活動
- 子どもに聞くとき答えやすい質問をする

【生活習慣】

- 1 日お弁当デーを作る（子どもが作る）

【学校支援組織の役割】

【情報の共有】

- 個別に指導をする、支援により実態を知ってもらう
- トラブルがあったときに話を聞いてくれる人が欲しい
- P T Aで朝食指導
- 地域の名人を呼んで体験活動

- 地域と子どもの人間関係作り
- 学習支援（放課後）
- 登校時間の地域の方々の見守り
- 老人会等登校指導
- 地域の人と一緒に給食会をする
- 地域の方が学校に足を運べるような行事を作る
- 挨拶運動をして見守っていることを知らせる
- 自然に触れる

（3班）テーマ2：学校と地域が連携して児童生徒の学習意欲を高める

【学校運営協議会の役割】

【学習支援】

- 補修活動をおこなう
- 子どもがわかる授業をする
- 学習支援サポーター、授業中
- 昼休みなど質問時間を設ける
- 長期休みにも質問時間を設ける
- わかりやすい授業をする
- 昔の遊びなどの体験学習
- 田植え
- 課題の質
- 子どもの実態の把握

【施設】

- 学校にきれいな小ホールを作る
- 寝転がって読める図書館
- ビオトープ
- 読み聞かせを増やす
- 英語の読み聞かせをする
- 花壇の水やりをする
- 作品を施設の人に見てもらう
- 自信に繋がる声かけを行う
- 花壇・畑の充実
- グループ学習を取り入れる
- 子どもの力に対応した指導計画と対応
- ほめられる体験
- 学校内の出来事を家庭に知らせる

【地域と子ども達との交流】

- ・音楽集会などでの交流
- ・交通指導での声かけ

【学校支援組織の役割】

【地域人材の活用】

- ・夢を語れる大人との出会い
- ・低学年の授業参観または支援
- ・地域で働く人のお話
- ・地域の名人を呼び
- ・地域の人材をうまく活用する
- ・家に帰ったらすぐ宿題をする
- ・APUの学生に英語の授業をしてもらう
- ・地域文化（絵画、書道、音楽）
- ・〇つけなどのお手伝い
- ・人生の先輩の考えや、技を伝える
- ・職場体験やキャリア教育の地域受入
- ・広い視野で学び、自分の良さを受け入れさせ、視野を広げさせる
- ・朝ご飯を食べる
- ・家で親が読書をする
- ・家で学校の話しをする

（4班）テーマ3 地域が学校に協力的になるように＜情報の共有＞

【学校運営協議会の役割】

【行事】

- ・早めに予定を知らせて欲しい
- ・その学校が目指す教育を理解して欲しい（学校の特徴）
- ・学校・学級単位で日頃の教育目標を発信する
- ・学校から育てたい子どもの姿、目指す姿を発信する
- ・学校行事の情報提供

【つなぎ】

- ・地域の窓口はコーディネーター、学校の窓口は地域教育担当
- ・地域ボランティアへの対応を親切にしてもらう
- ・学級担任との連絡を密に
- ・安全を確保しつつ、いろいろな人が学校に入っていける環境

【復活】

- ・地区の生徒会など各町でのつながり

【子どもの生活】

- 冬時間を過ぎてても外にいるこがいたら帰るように声をかけてほしい
- 放課後乱暴な遊びなどをしていたら子ども達に声をかけて欲しい
- 子ども達が間違っただことをしていたら叱って欲しい
- 学校の実態の把握

【学校支援組織の役割】

【あいさつ】

- 朝登校している子ども達にあたたかい挨拶をしてほしい
- 朝の挨拶運動に参加してもらう
- 学校関係者、子どもや地域の方が顔見知りになれるような活動

【繋がる場】

- 公民館の施設を先生方に活用してもらう

【宝・人材】

- 地域の方がどのようなことを得意としているのかを知りたい
- 出来る支援求める支援をコーディネートする

【行事】

- 各自治会の活動と校区内でのまとめ
- 地域行事の情報提供
- 何でも計画段階で相談してほしい
- 学校行事への参加、子どもも知る
- 地域でどんな活動が行われているのかを知る

3. まとめ：「別府市流のコミュニティ・スクール」システム

各班の発表を基にして、こうした取り組みを行うためのシステムづくりについて、各班から出された方策を整理すると次のようになる。現実的には対応不可能な内容があるが、「子どもの学びと安全安心のまちづくりシステムの必要性」からみて、この提案をどう具現化していくのかに関する行政の方針が求められる。研修が研修に終わらず、有効なコミュニティ・スクールを運営する方策が必要である。

1. コーディネーター役の人材の配置

(1) 学校毎にコーディネーターの配置が望まれる

→専任コーディネーターを配置する

→ボランティアコーディネートシステムをどう作るか

(2) 学校の窓口となる専任教員の加配が有効である

↑

- 校務分掌としての教員・事務職員の位置づけ？
- 教頭の職務？

(3) 公民館にもコーディネーターを配置して一定の地域のプラットフォーム機能を担う。

→学校運営協議会の委員と兼務することが有効である

2. 別府市の全体を担当するコーディネート機能が必要

→「学校支援別府市プラットフォーム」

3. 学校内の環境整備

→学校内に、コーディネーターやボランティアの居場所が必要である

4. 専任コーディネーターの雇用条件

→勤務条件・環境の改善が必要である

→長期雇用が専門性を高める

第1回研修会2日目

○コーディネーター 中川

○講師 杉並区立杉並第一小学校学校支援地域本部長 伴野博美氏

特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク 理事長 生重幸恵氏

○参加者7名

1ステージ コミュニテースクールの意味について

【講師】…CSはこぼれているものを拾い上げる取組。学校が原因とは限らないので有効なCSにする必要がある。CSは学校評価が基盤である。

意見1：CSは皆でやるものだ。運営協議会の役割を理解できていない。

意見2：学校、保護者、地域住民、それぞれの立場がわかる。推進するには配慮しなければならない

意見3：先生は「今で十分」からCSはいらないと思っているのではないか

意見4：家庭の役割が果たせていないことが課題である。

意見5：保護者はCSの情報がない

意見6：学校評議委員との違い、関係、重なりが不明である

意見7：地域の方に入ってもらうことで子どもにプラスになることは事実である

講師：CSは学校経営の中に地域教育力を入れるシステムづくりである。学校と地域の協力体を作らなければならない。

2ステージ 運営協議会の役割について

【講師】関係者評価が必要不可欠ある。運営協議会自身が、自分達の活動を評価することに意味がある（当事者評価）。また、委員の選任も重要である。

意見1：委員のメンバー・人選について

・PTAは関係者なので委員として適当なのか？

・外部評価という視点がPTAとして出来るか？

意見2：先生はするのは当たり前…教員としてどう関わるか！

意見3：教員はCS（地域からの支援）はいらない！とは言えない！

講師：CSの落としどころは風土作り（土壌・根底づくり）であり、長い目で見た子育ての環境づくりである。

講師：家庭教育支援事業をとって地域社会が支援するシステム作りを研究することも可能である。

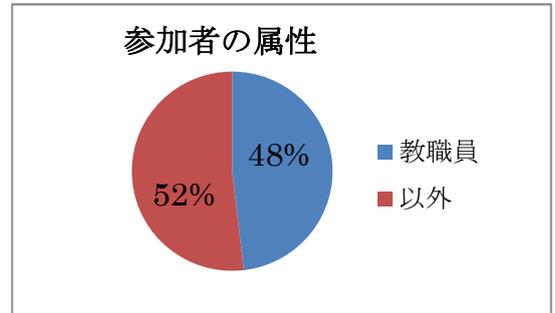
第1回研修会の振り返り

2日間の研修から見えてきたことの1つ目に、「地域住民への周知をどうするか」という大きな課題があること、2つ目に、「教職員がコミュニティ・スクールを正しく理解する」こと、最後に「協働のシステムづくりとその機能を発揮するシステム」づくりである。第2回の研修にはさらに多くの参加者を得て、多くの方々への広がり「教育の協働システム」づくりについて皆さんで考えたいと思っている。

第2回研修会のアンケートから見る研修の成果と課題

1. 参加者（アンケート回収）属性

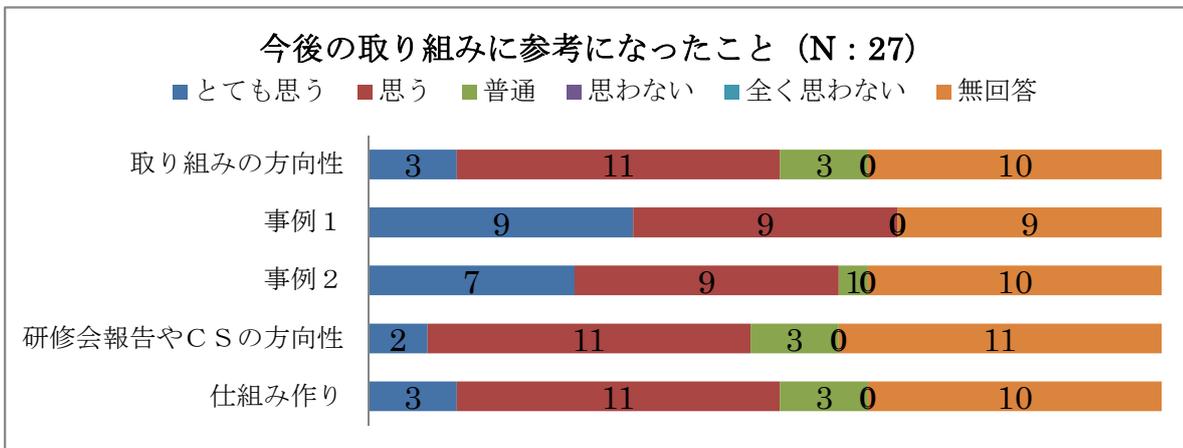
第2回コーディネーター研修会の参加者は、研修者 41 名、事務局・講師 12 名の合計 52 名であり、29 名から回答を得た。そのうち教職員が 48%と半数近くである。



2. 評価の概要

(1) 研修会の理解度

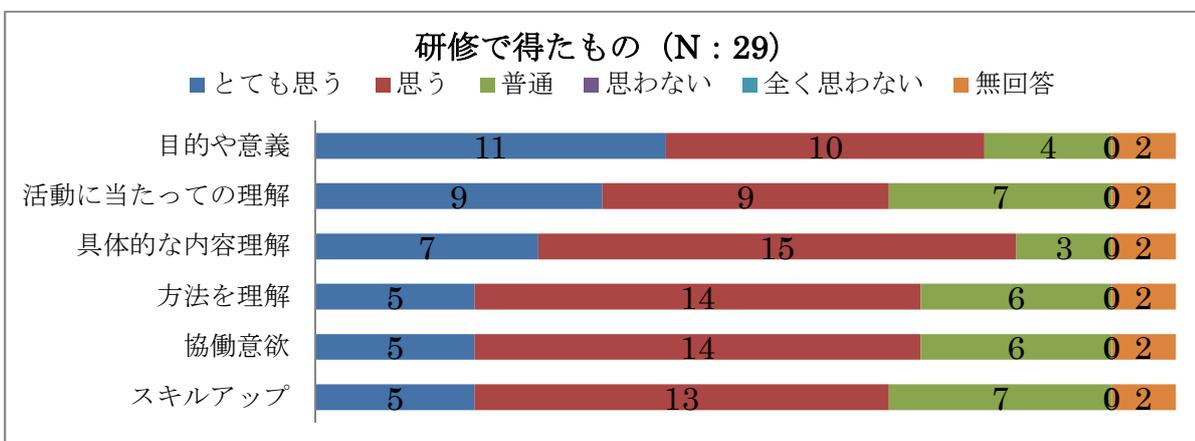
※「これまで気づかなかった等、今後の取り組みにさんこうになったか」という視点で評価する。



研修受講前に学べていなかった内容に気づいていただく設問である。今回の研修を通しての新たな気づき等を調査する趣旨でおこなった。回答を頂いたほとんどの方にとって参考になったことがわかる。無回答はその研修に参加していないためである。

(2) 自己評価

※「この研修に参加したことで何を得たのか」という視点で自己評価する。



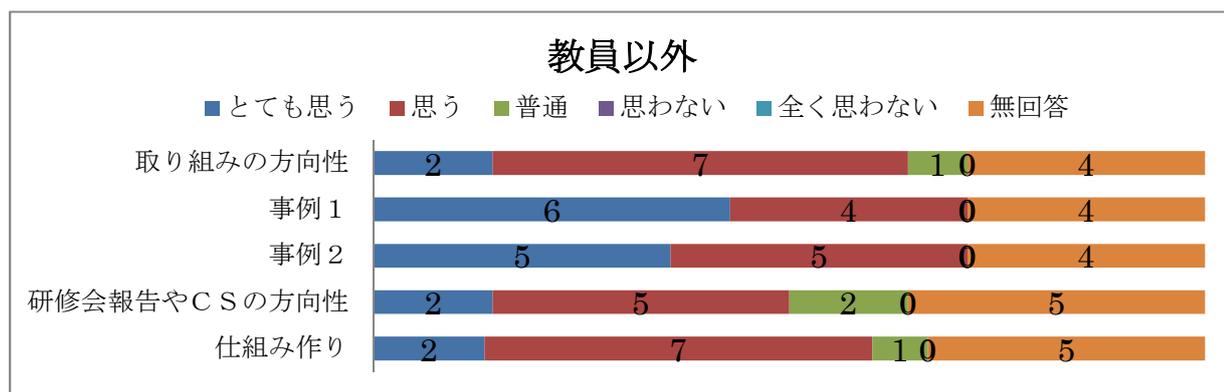
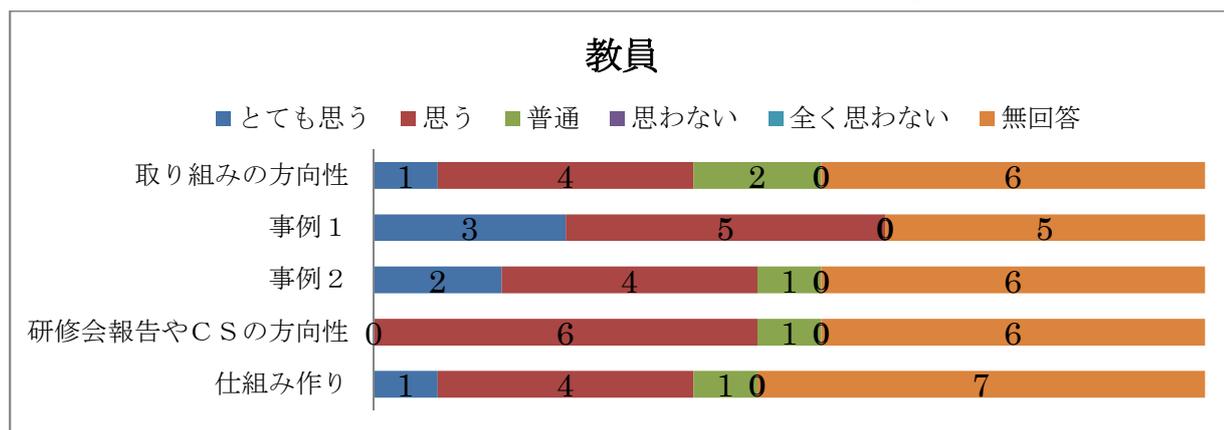
それぞれの項目に置いてほぼ75%の人が得るものがあったと回答している。

研修会の理解度および自己評価から、参加者にとって本研修会が有効であったことがわかる。課題はこの研修をどう活かすかということであろう。

3. 項目別<教職員と地域住民(教職員以外)の比較>の評価

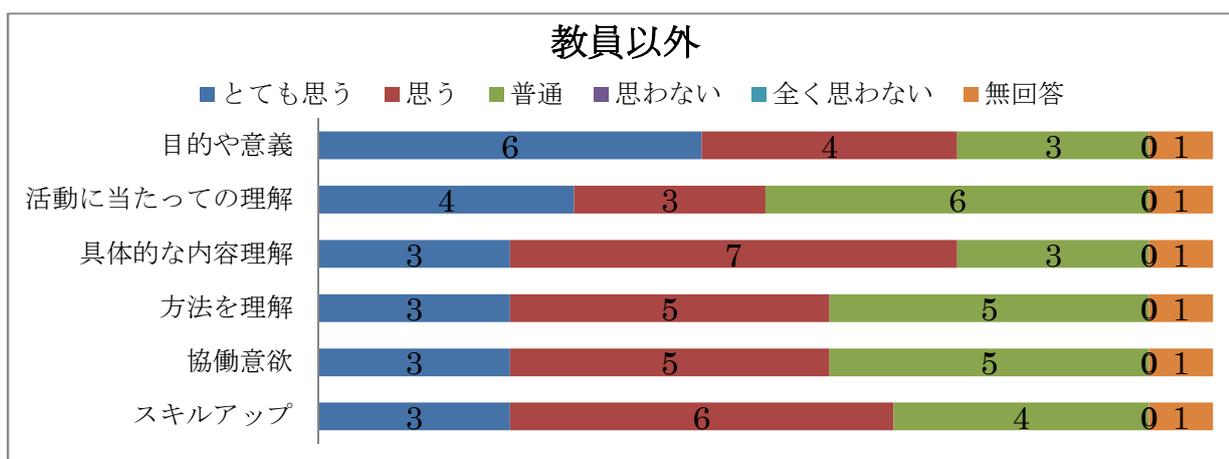
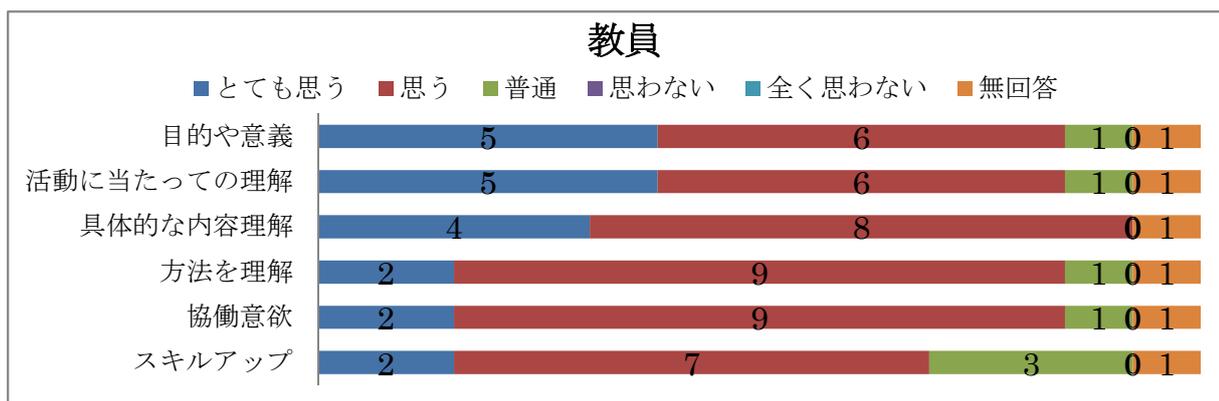
前述した「今後の取り組みに参考になったこと」「研修で得たもの」について教職員と教職員以外を比較すると、下の図のようになっている。

※「これまで気づかなかった等、今後の取り組みにさんこうになったか」という視点で評価する。



上の図は研修会の理解度であり、この図から教職員以外の方にとってどの項目も有効であるという傾向が見える。しかし、「思わない」「全く思わない」は0であり、双方に有効であったとも言えることがわかる。特に事例はわかりやすく効果があると言える。

※「この研修に参加したことで何を得たのか」という視点で自己評価する。



上の図は自己評価であり、この図から教職員の方が「今後の取り組みに参考になった」ということがわかる。このことから、教職員はコミュニティ・スクールの導入を目の前にして今後の取り組みにとって課題を抱えておりその参考になったことが窺える。これに比べ教職員以外はコミュニティ・スクールの導入に係る内容・課題等がまだ理解出来ていないのではないかと考えられる。とはいえ、6割近くの方が「とても思う」「思う」と回答していることから、今後、教職員以外の方へのコミュニティ・スクール導入の趣旨を啓発していく必要があるのではないだろうか。

4. 自由記述から見る「それぞれにおける必要な取り組み」

【設問】

現在、全ての小中学校をコミュニティ・スクールにするように進められていますが、その時に配慮することについて、ご意見を記入してください。

(1) 教職員

- ・地域コーディネーターを校区ごとに常駐（任）していただくと、日常的な対話から互いの意思疎通が有効的にできると考えます。「かけ橋」となる人材が重要だと思います。
- ・常に情報発信・交流をしていくことが大事ではないかと思えます。
- ・地域・保護者は特に必要です。授業以外で地域の方が教えていただいた後は子ども達は、目がいきいきしていました。私の意見ですが、大分県立先哲史料館の研究員が来て、先人さんの話を多く聞かせて欲しいです。別府市以外の先人さんも学んで欲しいと希望します。

- ・まず学校・市教委が、市・地域・保護者に、さらに情報発信して理解を得る努力が重要です。
- ・それぞれの立場で生きることを遠慮なく話しあっていくことが大切だと感じます。全てはこれから生きる子どものためにありますので、しっかり課題を把握し直し取り組んでいきたいと思います。
- ・同じ方向を向いてやっていかなくてはいけないと思うので、めざすところ、願いを学校と地域でしっかりと確認して進んでいかないといけないと思います。
- ・運営協議会の人選、いろいろな経験をもたれている方、多様な考え方を学校運営に役立てていくことや、地域の方々に、コミュニティ・スクールをもっと理解していただく。
- ・何かを始める際には、相当のエネルギーが必要なので、全てを学校まかせにするのではなく、人員を増やして行ってほしい。
- ・学校側の立場から見ると学校を開くと言うことがキーワードになると思います。そのために敷居を下げるために土曜日に学校公開をするなど、工夫が大切だと思いました。
- ・地域の力（人材や素材）を活用し、学校や地域を元気にしていくような前向きな取り組みをしていきたい。
- ・学校運営協議会をどのように設計していけばよいか・・・。

（２）教員以外

- ・地域住民の方々（自治会・民生委員・婦人会・老人会）等にもう少し啓発活動をされたらよいと思われます。公民館コーディネーターがまだ本格的に動いていないように思われます。そのためにも直接働きかけて下さい。
- ・地域活動の中にコーディネーターを増員し、地域の住民とのコミュニケーションをしっかりとってほしい。コーディネーターの方の学習時間を設けて欲しい（共通理解を高めてほしい）。情報公開（経過を知る・協力を深める）広報（意識改革）。生徒・児童が自然の中で安全・安心に行動活動につながってほしい。
- ・学校での取り組み方と参加される方のコミュニティーをしっかりと取り合う（打ち合わせ・話し合い）ことから大切になってくると思います。仲良くなることからが一番かなと考えます。なんでもがそうですが、おしつけにならないように。
- ・運営委員の人選が重要だが、運営委員になった方々のための研修の機会も必要。今日のような研修を運営委員（推進委員）となった方すべてが受けるべきだと思う。
- ・コミュニティ・スクールでの学校支援と公民館に対する支持が重要な気がする。学校支援はCSに、公民館は子ども教室を中心にしていくとよい。
- ・学校の先生の参加が少なかった。佐伯市・玖珠中の体験発表を聞いてほしかった。いい結果が出ているので。
- ・学校運営協議会のメンバー選定で参考になることが多かった。地域住民との共同参画事業をどのように進めていくか取り組みを具体化していきたい。
- ・やや理屈が多いのか？即行動すべきか？

【設問】

本日の研修で理解できたこと、発見できたこと、感想等を書いてください。

(1) 教職員

- ・何を通して、学校・家庭・地域が子ども育てに取り組むのかを明確にしていくことで良い効果が波及すると思います。その「何か」をしっかり共有していくことで良い効果が波及すると思います。その「何か」をしっかり共有していきたいと思いました。
- ・能動的姿勢で地域と関わっていくことが基本であると痛感しました。
- ・学校現場の状況を考えた時に、コミュニティ・スクールの必要性を感じた。地域の方々と力を合わせて、子どもたちの育成に尽力したいと思った。
- ・今日インフルエンザにかかった先生のピンチヒッターで来ました（非常勤事務職員です）。地域の方々の授業はこれから先、特に必要だと大いに思いました。佐伯市立上堅田小学校に見学行きたくなったり、伊頭教頭先生のお話をまだ聞きたかったです。私にとって、大切な時間をいただきありがとうございました。大変、勉強になりました。
- ・学校で取り組みそうな事例がいくつもありました。ありがとうございました。
- ・いろいろな立場で活動されている方々のお話が聞けて良かったです。皆さん、感じていることや願いは共通するものがあるなあと改めて感じました。
- ・1回目につづき2回目を重ねるともっと深まったし、見えてきたものがたくさんありました。前回に増して生重理事長のパワフルさに元気をもらって帰ります。ありがとうございました。
- ・子ども達が、別府が好きになって将来別府に帰ってきて、また別府の子を育てられるような地域になって欲しいと思いました。
- ・午後の部のみの参加でしたが、各グループごとの討議がとても充実したものになっていたと思います。ありがとうございました。
- ・教職が自信を持って事に当たってほしい、やや自身をなくしているのか。

(2) 教員以外

- ・もう少し活動しなければという気持ちになりました。
- ・いつも心にし、実施していること「できる人が、できることを、できる時に」を心がけています。
- ・佐伯の伊藤先生の発表には大変刺激を受けました。
- ・まずは、自分のふみ出す勇氣、参加する、知ることが大切だなと思いました。いろんな方との話が聞けてとても新しい気持ちが持てました。ありがとうございました。
- ・学校側は支援を望んでいる。かつ窓口がまだ教職員の間で調査していない気がする。
- ・学校の本気度がとても大切。地域の人の協力体制はできていると思う。
- ・関係者にコミュニティ・スクールの意味を十分に理解させる。
- ・自分の地域の子どもを自分たちで責任を持って育てることを忘れない。
- ・参加者の熱い思いが理解できた。

熟議からの提案

～「コミュニティ・スクールで学校教育活動の課題に対応するプログラム」～

課題1 いじめ・不登校・暴力等の生徒指導の課題を解決する

課題2 学校と地域が連携して児童生徒の学習意欲を高める

課題3 地域が学校に協力的になるための情報の共有を進める

課題1 いじめ・不登校・暴力等の生徒指導の課題を解決する

プログラム内容＝「学校からの通信を全戸配布する」＝

○子ども達の現状・課題を学校だけで留めるのではなく、地域の人達に広報することによって学校理解・子どもの現状理解を進めることが、地域と学校が共に子どもに関わる出発点である。よって、下のようプログラムを提案する。

1. 学校からの通信を作成する

○作成者 学校（校長・職員）の仕組作り（CS 運営協議会の中で作成する仕組作り）

※印刷費・紙代の確保が課題

2. 通信の内容

○学校の中の情報・地域へのお願いなど

○地域の子どもの生活の情報を得る

※子どもの自尊感情を育てる（子どもを褒める）という視点を大切にする

○地域での子どもの様子を吸い上げる仕組作りが必要

3. 配布方法

○子どもが配る

→子どもと住民の繋がり作り（挨拶・子ども理解）

この仕組から子ども達を地域の方々が理解し、子どもを育てる意識を持って頂くことが目的である。よって、学校も情報を広報し、地域も学校へ情報を提供する、という基本的な考え方が大切である。

そして、具体的な通信作成内容・方法の仕組作りを行うのをコミュニティ・スクール運営協議会が担うことによって学校と地域が繋がると考えるので提案する。

課題2 学校と地域が連携して児童生徒の学習意欲を高める

プログラム内容＝親子の繋がりを広める活動をする＝

○学習意欲は学力の向上のみならず自尊感情や自己肯定感につながり、自分で考え・自分で判断し・

自分で学ぶことの基本である。この学ぶ意欲を向上させるために下のようなプログラムを提案する。

1. PTA 活動で考える

- 親子で楽しむ理科実験教室や陶芸教室、地域探検、プロスポーツ選手によるスポーツ体験教室等の実施
- イベント開催と継続開催を企画
 - ※支援者（事務局）としてCSの学校運営協議会との連携が不可欠

2. 公民館活動

- 公民館子ども教室
 - 夏休み教室・おせちづくり教室・門松作り教室・・・etc
- 三世代交流の実施
 - しめ縄作り・郷土料理作り・作物の栽培・リース作り・・・etc
- 地域散策
 - 地域の歴史や文化、産業を知る
 - ＜地域の一員としての自覚の育成＞

学習意欲に繋がる様々な種を学校や地域でまき、様々なメニュー体験を通して子ども達が自ら考え、判断し活動する場を作る。その際、大人は肯定的な評価を行い、子ども達の自尊心の育成に繋げる。但し、活動において壁を乗り越える経験が重要である。

課題は、こうした取り組みを面としての地域活動にする必要があり、そのイニシアティブを学校・地域の両方に関わる役割を担うコミュニティ・スクール学校運営協議会が担うことを提案する。

課題3 地域が学校に協力的になるための情報の共有を進める

プログラム内容＝情報の一元化を進める＝

- 学校の情報を知らない保護者・地域・住民、地域の情報を知らない学校・保護者・地域住民、家庭（個人情報保護を前提）を知らない学校・地域住民の中で育てられている子どもたちであり、その中で課題を学校・家庭・地域住民が共有できる訳がないであろう。それぞれの情報をテーブルに乗せて学校ができること、家庭が出来ること、地域が出来ることを共有することによって、様々な角度から子どもを育てる地域が出来る。そのための情報の共有・提供のシステムを提案する。

1. 情報収集提供のプラットフォーム

- 情報収集提供ネットワーク
 - ・学校の情報を積極的に発信
 - ・地域の中で取材者をお願いする
 - ・学校及び地域に情報掲示板を設置する
- コミュニティ・スクール学校運営協議会の役割
 - 学校の敷居が高いため、地域住民で組織する運営協議会が担うのがベスト
 - 情報プラットフォームの役割←運営協議会の中に情報部を置く

○情報網

※公民館・青少年健全会議・自治会・民生委員・老人会・交番・公的報道機関・企業(郵便配達・新聞配達等)警察・その他

学校・家庭・地域が「我が子、我が孫として可愛がれるような子」「我が町・地域に戻ってくる子」「我が町・地域が好きな子」という子どもにしたいという願いがある。この願いを実現するためには、地域の情報プラットフォームによる情報の共有の推進がこのプログラムの目指すところであり、そのシステム作りを提案する。

この3つのプログラムは別府市内の学校・家庭・地域の関係者が考えたものであり、このプログラムをベースにしつつ、各コミュニティ・スクール運営協議会の中で議論し、今抱える子どもたちの課題に学校・家庭・地域が協働で関わっていくためのコミュニティ・スクールを考えて頂くための資料として頂きたい。